

古代倭国史の再構築

認識理論と科学的方法に則って

第Ⅳ章 書かれた歴史資料に切り込むために

「蝶の雑記帳 130-4」

第Ⅳ章 書かれた歴史資料に切り込むために	95
i. 古代社会の発展段階をとらえる参照軸	95
ii. 『日本書紀』を通観するための年代参照軸	102

第IV章 書かれた歴史資料に切り込むために

i. 古代社会の発展段階をとらえる参照軸

古代社会の構造を考えることから始め、それをとらえる視点をつかみ、そこからおぼろげでも倭国史の展望を開けるようにしよう。

いどこよりも近い血族の結婚を禁じる慣習があるとすれば、農耕と畜産を基盤とする社会の要素的構成体として、血族的に区別されるいくつかの大小の家族が小さな集落を形成して生活する村落モデルが有効だろう。近世までそういう共同体が国家のような大きな社会の構成単位であった。耕作面積が増え飼育する家畜の数が増えて生産力が増大すれば、人口が増加する。村落の複数氏族の後継者は、近くの地域に出て別の村落を構成するようになる。これがくりかえされて、いくつもの村落のある中地域が構成される。その中地域はさらに、まだ血縁地縁関係を色濃く残しながら広がってより大きな社会を形づくるだろう。

社会(文化)人類学者は、そういう原初的な社会を、モデル的に氏族社会や部族社会ということばで説明してきた。ところが、近年では氏族社会・部族社会ということばの使用がひかえられるようになったと聞く。しかしその社会モデルは、現実には観察できない古代の社会を分析的に理解しようとするとき、一定の有効性をもつ。実際、人類学者J. ダイアモンドは2012年に、伝統的な社会を考察する『昨日までの社会』⁽⁴¹⁾で、小規模血縁集団・部族社会・首長制社会・国家の四つの段階に分けて考えた。

この第IV章は、国家が成立するまでの初期社会を、上の四つのカテゴリーに分ける社会モデルで考えて、発展段階を素描しようとしている。実際に現象したそのような社会が観察者からどのように観られたかを、歴史記述を参照して示してみよう。

日本列島の古代社会が画期的な発展を始めたのは、現在の考古学的

知見からすると、おおよそ BC900 年ころ九州北岸域で水稻栽培が始まってからである。第Ⅱ・第Ⅲ章で見たように、この地域が中心域となって人口が増え文明が発展し、さらに外の地域へ波及していったことが推測できる。その社会の発展のようすを、説明が簡略だが客観的な記述をしている中国の歴史書でたどることができる。

『漢書』が、BC 1 世紀ころの状態を「楽浪海中倭人有り、分かれて百余国をなす。歳時^{さいじ}をもって来たり献見^{けんけん}すと云う」と書く。この記述は、漢の武帝が BC108 年に朝鮮半島に行政区域楽浪郡などを設置した情勢に対応している。その出先行政府が、楽浪郡から南方にある海峡を渡った九州北岸地域に小規模な部族的社会が 100 ぐらいあり、その社会はおりおり漢王朝（の楽浪郡）に出向く程度の発展段階にあると認識していたことを表現している、と解釈してよいだろう。この段階では、倭人の社会を「国」と表現していない。「倭」は中国側の呼び名で、発音はよく分からないからローマ字表記で「w*、*は母音」としておこう。

次の『後漢書』の記述は、AD 1 世紀に、「倭奴国から朝貢してきたので印綬^{いんじゆ}（金印と飾りひも）を授けた…」と書く。『後漢書』は、『漢書』の倭についての地理記述をなぞるように書き始めるから、倭の領域を『漢書』と同じと理解しているのである。序説で論じたように、直後の文に「倭国王」の名が出るから、後漢は、倭人の地域がその中心国の首長を王と認定できる程度の文明度に達している、と認識したのである。『漢書』と『後漢書』の表現の差は倭の領域がわずかながら発展しているようすをとらえていて、AD 1 世紀の倭は、中心国の王に金印を授けることができるほどの部族社会の連合を構成していた、と解釈できる。

次の『三国志』「魏書」は、——倭人は帯方^{たいほう}の東南大海のなかの山島^{さんとう}に国^{くに}と邑^{むら}をなす、もと百余国で漢王朝に出向いてきた。（AD238 年）に三十国ばかりから使いが来た…、（倭の代表国）邪馬壹国の女王に「親魏倭王」の金印と紫綬を与えた——と書く。後漢末の戦乱を制した魏は、

支配から逃れていた遼東地域と行政区楽浪郡・帯方郡を再度征服した。漢代の楽浪郡の南半部が帯方郡である。『三国志』は『漢書』の倭についての記述をなぞるように書き始めるから、当時の倭を『漢書』の記述した倭と同一視しているのである。次の第V章で論証するが、『三国志』の記述は、倭が九州島にあり、それぞれの部族社会が首長制社会に移行して、中心国の首長が魏の王朝から金印を授かって王の権威を認定され、王として部族連合社会を統合しつつあることを示唆する。王の率いるその部族連合社会が近隣の大きな部族社会と戦争をしていることも書かれている。

倭人の社会は、その程度はよく分からないが、とにかく拡大統合されていったと考えることができる。400年代になると、中国南朝の史書は、倭がすでに権威の確立した王が支配する部族連合王国に移行していたように書く。倭国王は、中華帝国が東アジアの諸王国に適用する位階制度にのっとった使持節都督の称号を与えられている。倭国の社会は、朝鮮半島の高句麗・百済・新羅の社会と同程度に発展して、500年代には、王が支配の制度を整える段階に進んだ、と考えることができる。

日本の国内史料である『古事記』と『日本書紀』は700年代初頭に編修された。史書というよりもむしろ王朝の正統性を主張する政府文書という傾向が強いが、日本列島の社会の具体相を教える。奈良盆地の社会は、小地域を代表する氏族の長たちが従属する形で、卓越する氏族の長を大地域を代表する首長とし形成され、その大首長がやがて王になった、と解釈できる。小地域は小さな部族社会だが、それぞれの氏族が村落をまたぐつながりをもっており、有力な氏族の長が婚姻関係を結ぶ他の氏族の支持を得て首長になった、と推測できる。そのような社会組織の拡大版が奈良盆地の王権を成立させたのだろう。この見方は、九州島での最初期の水稻栽培集団から中華帝国へ使節を派遣する初期王国へまでの社会発展にも、おおよそ当てはまるだろう。

古代日本社会についてのこのような把握は、昔の史書がもっぱら政治史を記述するので、政治的な統合の面しかとらえていない。文書に記録される前の古代社会の経済的な側面は、建築物や遺跡からの出土物などから推測するほかはない。言えることは、一般に、初めて古代国家が形成される時代まで、農耕・畜産・漁労とそれに用いる農耕具・車馬・船ほかの諸生産手段を生産する活動が産業の中心だったということである。もちろん、人間の生活が文化面にまで広がるほど高度化するにつれて（第Ⅰ章はその文化面を考えた）、多種多様な生産物が多量に生産されるようになるのは当然である。それでも、農耕・畜産・漁労関連の生産が中心で、それ以外の生産は従属的なものであった、とすることができるだろう。

社会は、いつもその生産活動つまり経済に見合うように編成されていったはずである。生産活動は生産される食糧を消費しその他の生産物を使用することで完結するのだが、血縁・地縁で大小の家族が結びついた初期の村落共同体では、生産物の消費使用はほぼその村落で完結しただろう。初期農耕の段階では、天候などの自然条件によって農産物が十分得られないときには、野山に入ってかつての採集狩猟的な食糧調達をいただろう。実際、水稻栽培をしていた初期の弥生遺跡では、どんぐりなどが弥生土器に混じって出土する。人口が増えて初期の村落共同体が地域的に広がって小規模血縁地縁社会となっても、その社会内で生産物を調達する自給自足が基本だっただろう。そして、生産物の分配・交換の何らかの習慣が自然につくられたと考えられる。

互いに見知らぬ人がたくさんいる部族的な社会になると、生産物の交換のために市が開かれるようになっただろう。そういう部族社会がいくつも存在する広域では、生産物を運搬して交換することが必要になる。この段階で、生産物の運搬と交易が経済の重要な要素となる。『三国志』「魏書」が倭人の朝鮮半島との金属材料の交易を記しているから、

そのころの倭国の経済が運搬と交易を含む段階に至っていたことが知られる。

経済を考えるときには、経済活動の場となる社会の組織が問題となる。血縁地縁で大小の家族間が結びついた初期の村落共同体では、家族的な人間関係が重要で、経験をつんだ一族の長老が尊敬をもって遇されることが起きただろう。氏族的な関係が拡大すると、氏族の系列を古くまでたどって中心軸にあったと見なされる家系が氏族の長の権威をもつようになった、と考えられる（日本では、藤原氏の^{うじ}氏の長者という呼び方が成立し、幕府を開く権限を与えられた征夷大將軍は源氏の^{うじ}氏の長者が任命されるという慣例ができた。ローマでも、支配者となったカエサルはそういう家系の者であった）。そういう氏族の長が、もし本当の老人なら一族の者から生産物をもらうことが起きたと考えられるが、その習慣から一族やそれに従属する人々から生産物を徴収する権限のようなものができたのだろうか。

格差の原因の一つには、人口が増えて農耕・漁労などに適した土地が減り、経済単位の家族や大家族のあいだに貧富の差が生じたことがあるだろう。それと同時に、人々が経済的に物事を考えるようになって、それぞれの家族や一族ができるだけ多くの生産物を得ようと競争するようになったからだろう。また、少人数の争いでなく、部族社会のあいだに戦争が起きるようになったことが大きな原因だろう。戦争は平時の消費よりも多くの物資を必要とするから、その収集権が必要になる。収集権は部族社会の有力な氏族の長たちがもつことになっただろう。また、多人数による戦争は指揮者を必要とする。有力な氏族の長たちのなかの適任者が、統率権をにぎることになる。その非常時の統率者が収集された物資の一部を取得することが起きるだろう（スパルタには二人の王がいて戦争の際に指揮者になった）。部族社会のあいだの戦争では、スパルタのように、相手の部族社会を征服し共同してその集団全体を

支配して生産物の一部を徴収するか、アテナイ(四つの部族で構成された)のように、それぞれの家族が相手の部族民を奴隷にすることが起きてもおかしくない。部族社会の支配層である首長や有力者にとって、戦争は実入りの大きな事業であった。こういう状況のなかで、ギリシアのような奴隷制の社会でなかったところでは、大多数の人間は生産物の一部を租税として徴収される人民となっていたのだろう。

ともかく、古代史の暗がりの中でそういうさまざまなことが起きたのだ。そして、世界のどこでも、王が支配する国家ができたころには、王が王国全体を、王に従属する家臣や小領主や豪族が各地域を管轄し、人民の付属する土地を領有する形式で租税を徴収する体制ができたのである。元の大小の部族のいた小地域では、人民と土地を支配する王か領主がいてそのまわりに少数の従属者がいて、残りの人民は土地から生産される生産物の一部を徴収される領民になったのである。この制度は長い年月を経て定着し、領民はそれを当たり前のようにして生活することになった。そして、多くの国で人民は、王や領主に徴発されて、ときどき彼らのために生産に従事する“労働者”になることも起きた。

愚かなことに、先人がさまざまなことをノートなどに記述しながら考え学習したのを真似て、対になる社会と経済そしてそれを制度的に支える政治について、観念的ではなく唯物論的で具体的な考察をしようとしている。だれもの頭の中にあるようなことを文字に表現するのは、本書の探求に少しは役立つだろうと思うからである。素朴な考察だがまだ言い足りないところがあると思われるので、もっと続けよう。

古代には、農耕・畜産・漁労と、それに用いる農耕具・車馬・船ほかの生産手段を生産する活動が産業の中心だったことを確認した上で、後者のことを考えてみよう。生産物の種類が多様になりその量も多くなれば、すべての人民が農耕・畜産・漁労だけに従事するのではすまなくなる。つまり、村落共同体とその集合には、多様な生産物を生産する

人々も住んでいたのである。近世の日本では村落共同体に住む住民をひとくくりに百姓ひやくしやうと呼び、多くの人が百姓を単純に農民と見なしがちだが、その実態は中国での元の意味の百姓ひやくせいである。彼らは多かれ少なかれ自家用の農地をもつが、農林漁業畜産以外の職業についていた人々もいたのである。

王国が成立したあとを考えれば、部族的な社会から王国内の一つの地方となった土地には、そういう百姓ひやくせいが住んでいたのである。社会経営の仕組みはようすを変えていく。多量の生産物を王や諸領主に届け、さらにほかの地方に届けることが必要になる。農林漁業畜産中心の王国でも、物資の生産・運搬・加工・交換・消費という循環する経済機構が存在したのである。つまりそこでは、相応の商業が発達したのである。中国古代の大きな城市はそのモデルである。そこには、王の宮殿だけではなく、常設の市場がもうけられていた。また例えば、王が塩の独占販売を手がけた。春秋戦国時代を記述した歴史書には、大商人が登場する。ただし、生産物の運搬・加工・交換・消費などの循環を担当する商人ほかの人々も王の統制下にあった。

古代に、王が、人民つきの土地を支配するいわゆる農業を基幹産業とする国家体制ができたのだが、この体制で、王は副次的にほかの産業も支配したのである。つまり、王（と支配層）は、社会と人民を支配すると同時に、経済機構もおさえてそこから収益を得た。言い方を変えれば、王の統治機構は、社会と人民を、経済機構をも管理する政治制度によって統治した。そして、宗教をも組みこむ祭政一致の制度が、東アジアのなかでもとりわけ日本列島で顕著で長く続き、明治維新の際にも再確認された。

王の登場以降のことを古代倭国に関連づけて触れておこう。中国南朝の歴史書が、—— 400 年代に倭国が朝鮮半島の百濟などと同じく何度也使節を送ってきた、それに対して、南朝の皇帝が倭や百濟の王たち

に「都督」などの位階と称号を授けた——と書く。授かったのは中華帝国が周辺の国々を序列づけて支配する形式的にもせよ制度上の位階や称号で、それらの国々は帝国内の王のいる郡に相当する格下の“王国”と見なされたのである。この時代に倭国は、朝鮮半島の国々と同程度の段階の王国に移行したと考えることができる。倭は遠い南朝の都「建康（今の南京）」に使節を派遣したが、この時代の朝貢は交易手段でもあり、貢物^{みつぎもの}に対し帝国は返礼として何倍もの文物を返した。倭はかなり本格的な交易をする段階に進みつつあった、と考えるてよい。

日本での漢字の読み「漢音」と「呉音^{ごおん}」があるが、仏教経典の読み「呉音」が多いのは呉音が400年代に入り始めたことを証言している（中国仏教の隆盛は400年代からである）。やがて、通訳ではなく使節のなかに漢字を使用できる者がいた、すなわち倭国王の宮殿には漢字を習熟する者が出たと考えてよい。音読の漢字表記と思われる地名や山の名が現われはじめたのはこの時代と考えられる。

中国が統一されると、600年に倭国王は北朝隋に使節を派遣し、隋から返礼使節が倭国に來た。隋の使節を都に迎えてパレードが行なわれ、倭国は中華帝国と国際外交の儀礼をとりおこなうほど制度の確立した国家に発展していた。600年代中ごろになると、『日本書紀』が、律令が制定されてその都が隋・唐の都長安を模して条坊に区画するように整備された、と書く。倭は朝鮮半島の百済や新羅よりも体制の整った王国に発展したように見える。

この第i節で考え素描した倭国の発展の諸相を具体的に探求することが、第二部の課題である。

ii. 『日本書紀』を通観するための年代参照軸

日本の資料『記・紀』についても、第二部の議論のために概観を得ることが必要である。しかし、第二部の具体的な考察に影響を与えるほど

踏みこんではいけない。この第ii節では、『日本書紀』の記述する歴史事象に言及できる程度の年代参照軸を得る努力をしよう。おそらく歴史学者や考古学者は頭のなかに自分なりの尺度をもっているのだろうが、共通了解となる標準的な年代軸があるようには思えない。大まかでも本書の議論に適用できる精度の年代軸を抽出してみよう。

『記・紀』を読むと、初めのころ、奈良盆地で大首長となっていた“王家”の伝承で最も重要だったのは王家の系譜だったことが判る。妻たちの出自と子のなかの誰が家を相続したかが記述の骨格をなしている。そして、古い時代になるほどそれがいつごろのことだったかが不明だったことが判る。文字を使用しない時代、記録がなく系譜は口承で伝えられるしかなかっただろう。語られる子たちの出生年も家督相続の年も不明である。時代の進んだ500年代の26代継体王についても、系譜中心に語る『古事記』が御年43歳で亡くなったと書くのに、『日本書紀』は年57歳で亡くなったとする。継体王は33代推古王の祖父で、推古王については現在多くのことが語られ、その事績と年代がよく知られているのに、その祖父の年齢がいまいちなのである。『日本書紀』は、継体王が即位した年からの事績を編年的に長く記述しておきながら、在位年を外国の史書『百済本記』によって3年ずらした(0のない数え方で28年から25年にした)と注意書きする。500年ころまでの『日本書紀』の記述がどの程度信頼できるか疑念を生じさせる。

それでも誤差3年なら大きな問題は起こさないだろう。『日本書紀』の記述に基づいて継体王の即位した年を507年として、それを定点として前後の年数を検討しよう。

歴代天皇の在位を西暦で記した系図を宮内庁がホームページに載せている。在位年数が80年を超える天皇が五人もあることが驚きを誘うが、720年に日本国が『日本書紀』に記したことを、現代の日本国政府が追認しているのである。天皇ということばは600年代後半になってできたいが、「継体」

というような諡号^{しごう}ができたのは 700 代になってからである。700 年以前に諡号と天皇という呼称を用いるのは判断を曇らせるので用心しなければならない。本書では、便宜のために簡潔な諡号を用いて「〇〇王」と呼ぶことにする。明治になって、天智王の子が即位していたと公認されて 39 代弘文天皇として挿入されたので、『日本書紀』の数え方で 39 代だった天武王以降の代数は一つくり下げられた。

図IV.1 は、33 代推古王までの在位年数を黒い縦線でグラフ化したものである。横軸に代数、縦軸に西暦年数が目盛られている。上部に書き入れた漢字二文字は王の諡号である。『日本書紀』よりも前に編修された『古事記』は推古王で終わっている。この図IV.1 では、二つの資料に記載されたその推古王までの年代を考える。

『記・紀』は、26 代継体王が 15 代応神王の 5 世の子孫であると言う。継体王の父は奈良盆地の王でなかったから、5 世代も経た傍系でありながら王家を継いだのである。すでに古墳時代の最盛期を過ぎた時代のこの王位継承には政変が伴っただろうと推測できる（イギリスでいえば、男系のプランタジネット家系で交代した三王朝のあと、傍流のヘンリー 7 世がチューダー朝を興したのに相当する）。継体王の年長の二人の息子が王位を継いだあと、前王朝の王の娘を母とする欽明王が前王朝の血筋も引いて正統性を主張できる王になった（ちょうどヘンリー 8 世のように）。以後の王家は、継体王と欽明王の子孫という見方を強調して応神王に始まる応神朝の子孫ということができる。700 年代末にこの王家が、宗廟伊勢皇大神宮に加えて九州の宇佐宮を第二の宗廟として応神王を祭神としたことを、故^{ゆえ}なしとはできない。

定点とした継体王の即位の年 507 年以降については、『日本書紀』の書く年代はほぼ正確とすることができるだろう（継体王の没年の問題は第 VI 章で論じる）。しかし継体王よりも以前について、『日本書紀』が書く 100 歳を超える寿命や 100 年前後の在位年数を受けいれること

はもちろんできない。図IV.1 の在位年数を表わす 500 年以前の縦線は修正されることを待っているのである。人の平均寿命は古代になるほど短かったと考えられるから、大幅な修正が必要である。

世代間で王位の継承が平均どのくらいの年数で起きたか知るために、試みに徳川將軍家で試算してみよう（徳川幕府は実質的に日本列島全体を統治する中央政府であった）。就任したとき高齢ですぐ退任した初代將軍を除外し、15 代將軍は末期の政治的混乱で 1 年しか在位しなかったから省き、兄弟間の家督相続は世代間の年数を見積もるとき攪乱するから 4 代・5 代將軍を 1 世代として、2 代から 14 代までの 13 世代で 1605 年～1866 年を統治したとすると、1 世代が 20 年である。分家からの家督相続もあるから補正するために仮に 12 世代としても 1 世代の在任期間は 22 年に満たない。親から子への相続でも在位が長くない將軍もいたのである。徳川幕府の統治は長く平和で家督相続で大きな争いもなかったから安定した相続だったのに、22 年足らずなのである。

26 代継体王の前の数代のあいだ混乱した王位継承とされているから、その間の王家の 1 世代をいくらか見積ればよいが簡単ではない。けれども、継体王は分家で 6 代目とされているから、その家の継承は権力争いのないわりあい安定したものだったと考えてよい。継体がその家督を継ぐ前の 5 世代の期間の上限を長く見て $5 \times 25 \approx 125$ 年足らずとすれば十分だろう。権力争いのない分家では親が若いころの子が家督を相続したと考えるのが合理的である。平均寿命の長くない古代には男子を早く得るのがどの家にとっても重要だったと考えられるから、子をなしたのは 20 歳そこそこという事例が多かっただろう。継体の 507 年の即位は成人して十数年は経っていたとするのがよさそうだが、総合的に推理して、応神王の在位した年代の中央値を 500 年より 125 年ぐらい前の AD375 年ころとし、+25 年-15 年の誤差を許容すれば十分だろう。このような仮説的な見方を導入するのは危険だけれども、グ

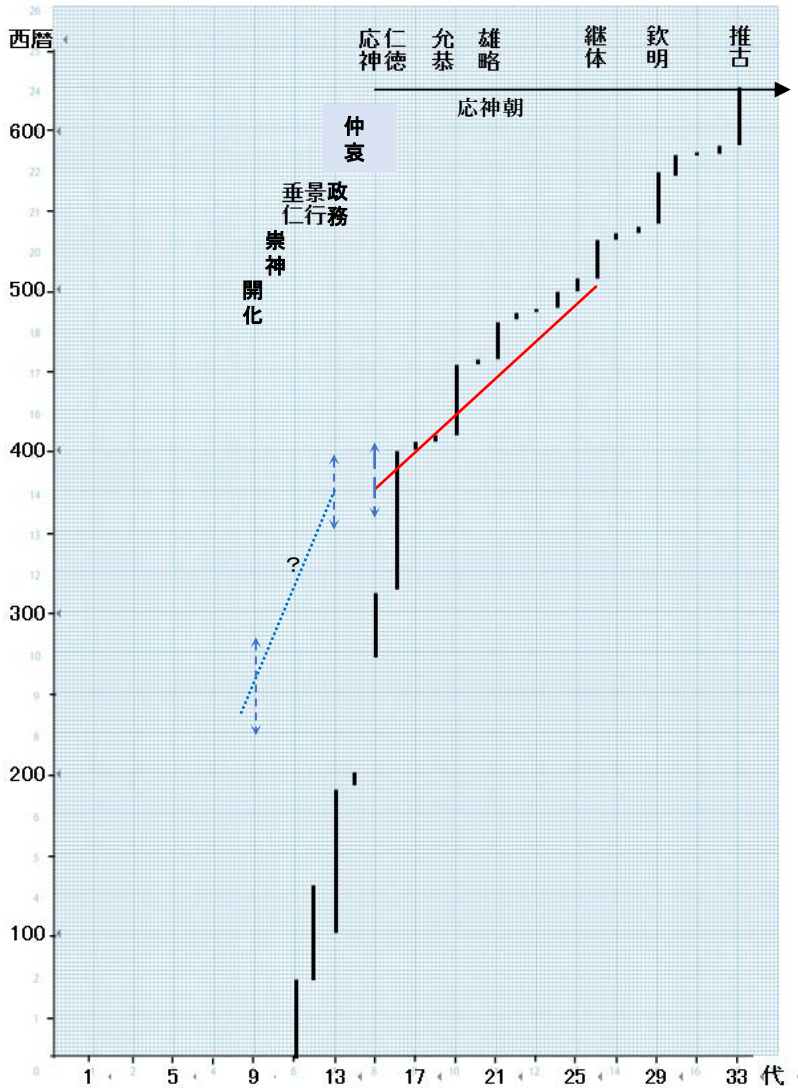
ラフ化するとそれを目安に加減して考察することを可能にし、実際的な有効性をもつ、と考える。図IV.1 にその補助線を赤い線で誤差棒を青い点線で書き入れてある。

奈良盆地にいた応神王の直系王家の王たちの在位年数は、『日本書紀』の記述が王位継承の乱れを報告しているから、図IV.1 の黒い棒線の長さが赤い推定線からずれても問題ではないが、ずれは大きくはない。15代応神王までさかのぼる推定はそれほどおかしくはないだろう。

困難なのは、『日本書紀』が、応神朝の前の王家の王たちの在位年数をとても大きなものとし、11代垂仁王の即位をBC29年として図からはみ出るほどにし、初代“神武王”の即位をBC660年も昔のこととするからである。さらにおかしいのは、応神王と父とされる14代仲哀王のあいだに75年くらいの断絶があつて、その間は母である神功皇后が摂政として統治したとすることである。応神の在位期間40年と合わせると115年にもなってしまう。ここには継体王の王位継承よりももっと深刻な断絶があつた、と考えざるをえない。ちょうどウィリアム征服王が外部からイギリスに侵入してきたような戦争があつたのではないか。実際、『日本書紀』はそう考えられる戦いをほのめかす。

実態を推測するために、『日本書紀』のシナリオに沿って解釈してみよう。10代崇神王を、『古事記』が領土を広げたので「^{はつくに}初国知らししすめらみこと（初めての国を支配下においた王）」と呼ぶから、歴史上重要な人物と考えなければならない。系譜が王統にとって重要な伝承だったとしてそれに注目すると、14代仲哀王は10代崇神王から数えて5代目とされている。しかし、『記・紀』の系譜をたどると、仲哀王の母は11代垂仁王の娘とされ、応神王の妻は12代景行王の孫とされその子が16代仁徳王とされる。14代仲哀王は世代的には11代垂仁王に近く、その子の15代応神王も12代景行王からあまり離れすぎてもいけないだろう。この系譜のひずみと図IV.1 が示す年代的に大きなギ

ヤップは、やはり王位継承に乱れがあったことを示唆している。そう考えると、仲哀王の父は伝説上の人物ヤマトタケルとされるのが気にな



図IV.1 奈良盆地の王の年代推定

る。『記・紀』に導入されている景行王の九州遠征譚と子のヤマトタケルの伝説は仲哀王・応神王につなげる役目を負っているのだろうか。

迷路に入りこむのをやめてもっと冷厳な解釈を試みよう。図IV.1に現われている大きなギャップは、尋常でないやり方で15代応神王が王位に就いたと考えるのが合理的だ、と。『記・紀』は応神の父仲哀は現在の下関や福岡市に宮を置いたと書き、奈良盆地で王位に就いた実態を疑わせる。しかも、応神は九州から来たとする。母の神功皇后の血縁関係を奈良盆地に結びつけているのは後づけかもしれない。『日本書紀』を編修した史官たちは混乱した事態をうまく語ることができなくてギャップが露呈しているのではないか。700年代末の奈良の天皇家の人々も、それを順当な王位継承と信じることができなくて、自分たちの王統の祖先を応神王とし、その出身地を九州としたと考えれば、つじつまの合う理解が可能になる。そうすれば、すでに宗廟の皇大神宮を伊勢に建てていたのに、九州の宇佐宮を第二の宗廟と認定し応神王を祭神として祀ることにしたことにな得がいく。

こう推測し仲哀王をカッコに入れて（在位年数を誤差棒に入れて）、図に崇神・景行王を盛期とする王朝の時代を想像する外挿線を描くことを試みよう。『記・紀』は、初代神武王から13代政務王までみな父から子に位が継承された、と書く。権力争いがなく、応神から継体までの分家での相続のように平穏な相続だったのだろう。けれども、平均寿命の短かった古代のことだから、1世代の年数を25年とするよりも徳川將軍家の1世代平均22年に近づけた方がよいだろう。応神王が13代政務王の代に侵入してきたと仮定し、9代開化王までの5代をおおざっぱに115年ぐらいとして、図IV.1に外挿線をおそろそろ引いておこう。もちろん、誤差は大きいだろうが。

参考文献

- (1) 谷川修『倭国はここにあった 人文地理学的な論証』, 白江庵書房, 2021 年.
- (2) 小川光三『大和の原像—知られざる古代太陽の道』, 大和書房, 1985 年.
- (3) 水谷慶一『知られざる古代』, 講談社現代新書, 1980 年.
- (4) 杉本智彦『カシミール 3D GPS 応用編』, 実業之日本社, 2014 年,
最新版ソフトウェアはインターネット上のホームページ.
- (5) 谷川修 電子書籍『日本神話の起源と変遷』, 白江庵書房, 2022 年.
- (6) 小林健彦「新羅国の文武王と倭国」, 新潟産業大学経済学部紀要, 第 43 号,
2014 年.
- (7) 服部英二『転生する文明』, 藤原書店, 2019 年.
- (8) 谷川修 <http://hakkooan.net/>蝶の雑記帳, 「85 ボロボドゥール寺院の太陽の道」, 2019 年.
- (9) 井澤毅「遺伝子の変化から見たイネの起源」, 日本醸造協会誌, 112 巻 1 号,
2017 年.
- (10) Shinichiro Honda ホームページ「アワ, キビの起源」, 2020 年.
- (11) Xuehui Huang, Nori Kurata, *et al.* A map of rice genome variation reveals
the origin of cultivated rice, *Nature* 490 (2012), pp.497-501.
- (12) 倉田のり, 久保貴彦 <http://first.lifesciencedb.jp/archives/> 6065, 2012.
- (13) 谷川修 <http://hakkooan.net/>蝶の雑記帳, 「38 鶺鴒と稲作の伝来」, 「38b
稲作と鶺鴒をもたらした人々のお歯黒」, 2016 年.
- (14) 谷川修 電子書籍『稲はどこから来たか 気候地理学的な推論』, 白江庵書
房, 2022 年.
- (15) Shinichiro Honda ホームページ「イネの起源 1」, 「イネの起源 2」, 2018 年.
- (16) S. A. Marcott *et al.* A Reconstruction of Regional and Global Temperature
for the Past 11300 Years」, *Science* 399 (2013), pp.1198-1201.
- (17) Wikipedia「海水準変動」, <https://ja.wikipedia.org/wiki/海水準変動>
- (18) 近藤純正「1993 年の大冷夏」, 天気(日本気象学会), 41 8, 1994 年.
- (19) J. L. バック, 「Land Utilization in China」, 1937 年.

考え方だけの孫引き。

- (20) goo ブログ 地理講義 32 中国の農業 農業地図, 2011 年.
- (21) <https://j2.wikipedia.org/wiki/ケッペンの気候区分>
- (22) 宮本一夫ほか「東北アジア農耕伝播過程の植物考古学分析による実証的研究」, 九州大学学術情報リポジトリ.
- (23) 原宗子「古代黄河流域の水稲作地点」, 流通経済大学 創立五十周年記念論文集 1, 2016 年.
- (24) Robbeets M., Bouckaert, R., Conte, M. *et al.* Triangulation supports agricultural spread of the Transeurasian languages, *Nature* 599 (2021), pp.616-621.
- (25) 藤尾慎一郎『日本の先史時代』, 中公新書, 2021 年.
- (26) 李亨源「韓半島の初期青銅器文化と初期弥生文化」,
(日本の)国立歴史民俗博物館研究報告 第185集, 2014年.
- (27) 後藤直「朝鮮半島原始時代農耕集落の立地」, 第四紀研究33(5), 1994年.
- (28) Yim Yang-Jai & Kira T., 日本生態学会誌 1975年, (図だけの孫引き).
- (29) 佐藤洋一郎『稲の日本史』, 角川ソフィア文庫, 2018 年.
概略を「JAICAF お米のはなし 12, 14」で知ることができる.
- (30) 国際気象海洋株式会社ホームページ.
- (31) 中村大介「弥生時代の開始：朝鮮半島から日本列島へ」, かながわの遺跡展特別講演第2回.
- (32) 可児弘明『鵜飼』, 中公新書, 1966 年.
- (33) ファン ハイ リン 「お歯黒文化圏に関する試論」, シリーズ ベトナムシンポジウム 2013, 2013 年.
- (34) 原三正『お歯黒の研究』, 人間の科学新社, 2006 年.
- (35) 周達生 「中国の高床式住居」, 国立民族学博物館研究報告,
巻11 4号, 1987年.
- (36) 浅川滋男 「中国の民家・住居史研究」, [https://www.jstage. go.jp/ article](https://www.jstage.go.jp/article).

- (37) 「土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム」ホームページ.
- (38) T. Izawa Reloading DNA History in Rice Domestication, Plant and Cell Physiology, pcac073, 03 June, 2022年.
- (39) 井澤毅 「イネが光周性花芽形成のモデルって本当ですか?」, 時間生物学 Vol. 25, No. 1, 2019 年.
- (40) 古田武彦 『邪馬台国はなかった』, 朝日新聞社, 1971年.

2024 年 8 月天地始肅

海蝶 谷川修

